

三勝半七情死の實説と上演略史

― 附「道行霜夜の千日」の演出 ―

大和五条新町の赤根屋半七と大坂長町の美濃屋三勝が元禄八年十二月六日夜（一六九五）千日墓地で心中した事件は浜松歌園の「南水漫遊」初編や、西沢一風の「伝奇作書」続篇中の巻に伝えられている。これらはかなり正確詳細に事件の全貌を伝えているにかかわらず、前者は事件後百廿年の文化の末になったものであり、後者は更に三十年後れて天保から嘉永にかけて出来たものである。その記事に一抹の疑問を持たれていた。所が最近、岡本良一、内田九州男両氏の手で清文堂から「道頓堀美人関係文書」が出版されて、これらの聞書が信用度の高いものであることが判明した。三勝半七の事件はこの中、慶安四年から享保十八年までの旧難波村庄屋から代官所または町奉行所に提出された願書や届書を綴った「千日墓所一件」の中に記録されている。今その全文を左に引用する。

一、千日墓所石垣南根畑男女仇死之事

吉 永 孝 雄

一、元禄八亥年十二月七日朝間に、墓所南の畑に男女相果て居り申し候由、墓所聖同所垣外申し来り候故、年寄召連れ罷り出で様子見附け候て、御屋敷へ年寄式人遣し、我等は跡にて諸色書付目録いたし置き候、御屋敷より関戸条左衛門殿・波刃為右衛門殿御出で成られ候て御改め、書付け等法善寺にて御認め成られ候内、町御奉行へ女の親御注進仕り候故、御檢使御出で成られ候て立会これ有り候、双方御見分書付け出来、玄蕃様へ兩人御出で我々も参り候へば、相果てし死骸衣類等相渡し候様にと仰せ付けられ、手形いたし渡し申し候男は大和のものあかねや半七と申し候由、宿長町
壱丁目中村屋安右衛門と申すもの交け取る

（欄外）町御檢使

女は長町四丁目みのや平左衛門娘にて候由、平左衛門方へ引取り申し候

石川孫介殿

御兩人御出

横山間右衛門殿

なお「南水漫遊」の「三勝半七墓」の記述を主として、「伝奇作書」の「三勝半七情死の話」と睨み合わせてこれを詳述すると

大和国宇智郡五条赤根屋半七大坂において心中の節檢使の趣正徳三巳年辻弥五左衛門棟控候にこれ有り候を写し取り置き候也、弥五左衛門棟大坂へ御出で成られ候節摂州西成郡下灘波村御代官所也、右の節檢使役人御同人棟御手代関戸条左衛門、渡辺為右衛門

覺

- 一、摂州西成郡下灘波村領墓所南側石垣の根畑にて年頃三十四五の男、年頃二十四五計の女咽のどを切り二人共相果て居り申し候
 - 一、男の班咽せき二寸計り、腹臍はらの上一寸計り突き班に相見え申し候
 - 一、女咽四寸許り突き班くり候様に相見え申し候
- 一、男の衣類

- 一、郡内縞両面綿入一つ
- 一、つむぎ茶帯 一筋
- 一、羽二重下帯 一筋
- 一、革足袋 一足
- 一、じゆず 一連 但し手にかけて罷り在り候
- 一、脇差、拵え焼き付金具長さ二尺、一寸糸柄 一腰
- 一、小刀、但し脇差の鞘に御座候、銅柄 一本

一、女の衣類

- 一、日野すす竹小紋綿入れ 一つ 但し日野茶裏
 - 一、郡内縞綿入れ 一つ 但し同縞紫色裏
 - 一、京洛冬帯 一筋
 - 一、日野湯具 一つ
 - 一、木綿足袋 一足
 - 一、縮緬服紗 一つ 但し紅裏あざ
- 右の通り男女着し居り申し候

- 一、封じ状上書三田は、そのや平左衛門棟 半七一通
 - 一、木綿茶色布子但し是は二人の者下に敷き居り申し候
- 右の通り吟味仕り候所相違無く御座候以上
- 元禄八年亥十二月七日

- 下灘波村庄屋 甚左衛門 印
 - 同村年寄 源左衛門 印
 - 同 七兵衛 印
 - 同 九郎兵衛 印
 - 辻弥五左衛門御内
 - 関戸条左衛門殿
 - 渡辺為右衛門殿
- とあり、更に口上として

一、摂州西成郡下難波村領墓地石垣の根畑にて年頃三十四五計の男、年頃二十四計の女咽を切り相果て居り申し候処墓所ひじり井びに乞食垣外の者難波村庄屋方へ申し来り候に付き、早速右の通り御注進申し上げ候処、関戸条左衛門殿、渡辺為右衛門殿御出で死骸衣類等御改めの上当村中井びに近所の者何の覚えもあやしき事もこれ無き哉と御吟味成られ候へ共、右の義に付き少しもあやしき儀御座無く候

一、右二人の者死骸番人附け置き候処、上本町八丁目京屋安右衛門三丁目大和屋八郎右衛門見申し候て右の女は長町四丁目みのや平左衛門娘にて御座候由申し候

右の外別条も御座無く候に付き弥死骸番人附け置き申し候、御檢使相済み候上は右死骸大切に仕り置き候て御下知次第仕るべく候為め口上書指し上げ申し候 以上

年月宛名庄屋年寄の名前同断

とあり、外にさん(三勝)の姉の夫、上本町八丁目札の辻町の安右衛門の「差上げ申す口上書」と三勝の父の長町四丁目荒物屋市兵衛貸家に住む美濃屋平左衛門の「差し上げ申す口上書」と半七の定宿であった大阪長町一丁目近江屋庄右衛門貸家の中村屋安右衛門 印の「口上」があり、書残した一通には

尚々御袋様には、いっぞやくれとく申し置き候御事も皆偽りと成

り、今更恥かしく存じ候へ共、しかし過去の業なりと思召し御あきらめ頼み参らせ候

今度三勝、私、かく相果て候事嗚々にくしと思ほし召し候はん、なれども、互に捨てがたき一命にかけ、かく成り行き候事くどく具さに書かず候へども、恋の切なる事御推量下さるべく候、各様にも身の上下事なる娘、我が身も独りの母と申し、殊には身上の事も弁へず、人口にかゝる死をとげ候も、めい／＼浮気なりと思召下さるまじく候、とにも角にも筆にはいはずがたく候まゝ、なからん跡不便と思ほし召し、よろしく、たのみ存じ候、次第に跡にてしれ申し候間筆をとめ申し候 以上

十二月

半七

三勝どの御袋様

平左衛門様

なおこの他「南水漫遊」には三勝が養父平左衛門に残した書置、半七が宿所中村屋安右衛門方に残した五条の母への長文の書置がのせられている。

この情死事件は同月大坂岩井半四郎座でとり上げられ「茜の色揚」と題して上演された。半七は杉山勘左衛門、三勝は花井あづま、今井善右衛門は三原十太夫、みのや平左衛門は座本岩井半四郎、三勝母は鹿本伊左衛門、冬から春まで持越し、百五十日の当り

であった。

元禄十年の役者評判記の「うしの年京大坂ともぐい評判」を見る
と半七役の杉山勘左衛門の項では

一、坂田どのの夕霧に勘左衛門どのの心中「あかねの色あげ」見
物事じやと申事

一、せりふ事かるいしだし、諸芸苦にならぬ所がお上手じやと申
事

一、やつし事は堀にはりあふてする人なし所作事のうつるがおも
しろいと申事

一、ぬれ事はひだるい時に物くふ程むまい（以下略）
とあり、又三勝役の花井あづまの項では

何と花井あづまが芸は何がよいぞあししいぞ、さればでござりま
す、先づ此君のほまれは三かつ此かた也うれいよくうつり、せり
ふごとぬれ事があつてつべくべたくと、やりばなしにやつ
て、やりこくられます 云々

と評されているのを見ても三勝役が出世芸であったことがわかる。

しかし竹本座ではこの事件はとり上げられなかった。人形芝居で
は世話ものをとりあげる機運は元禄十六年の「曾根崎心中」まで持
たなければならなかった。

元禄十七年の「松の葉」の続篇「落葉集」の第五巻に高山四郎兵

衛作の「三勝心中」の上方歌のついている。後、広橋勾当の妙音に
よって上品になり世にもはやされた。歌詞は

戯れ遊べ隠江の思ふ心の如何でかは、舟さす棹の指して知るべき

（註「伊勢物語」の歌）田舎人、曹半七三勝が心中浮名を積み送る、京

も浪花の物語、間に櫓の水添へて、貰い涙に聞くばかり、常盤の

松と契りしに、仇な金ゆへ身を書き入れの、金の替りに女房にな

れと、せがみ立てられ返事もならず、いとし男と談合すれど、通

ひ馴れにし二人が中も、親に洩れつゝ不首尾となりて、金の才覚

なりにくければ、思はざりにし身の恥辱、所詮浮世を捨草の、露

と消へなば思ひはせまじ、そなた斗は万年迄も、金の替りに男と

添やと、恨み顔にて立出でければ、三勝取付き、のふ情なや、先

の男と添ふ心なら、何の斯うした話をしましよ、おれが心を知ら

ぬか何ぞのよふにと、情なき事をと涙を流し、親の為めとて由な

き手形、書きて口借しや言訳立たぬ、いとし我が子を振捨て置い

て、死ぬる心を可哀と思ふて、死んだ後にて回向を頼むと、差い

た脇差引抜きければ、半七はつと取付いて、よしや由なき怨の言

葉、是も何ゆへ身が貧からぞ、僻む心は許したもれ、嘘ではな

いぞ、扱も嬉しやいとしき人と、共に消へなん事こそ願へ、早う

ござれと夜半の頃に、夫婦互に念珠を繰りて、なまみだゝなま

みだゝ念仏を路の致取りに、夫婦一緒に千日寺の、鐘の響に夜

は何時ぞ、八つでもあるか、何時もお通が目を聞く時分、母よ
と尋ねて泣こが、死する命は借しからねども、さすが親子の
別れの絆、切るに切られぬ事こそ悲しと、後を見返り歩みもやら

ぬ、のふく夜が明けるやら、早や晨朝の回向の鐘の、あら有難
や、いざや最後を急ごふと云ふて、火屋の東のさいたら畑、露か
時雨か身を知る雨か、笠屋三勝袂紗を出して、褌と褌とをしつ
と括る、男涙をはらりと流し、さてはそなたは殺して置いて逃げ
も走りもせうかと思ふて、褌を括つて置きやると見えた、おれが
心はさふではないにと、取付き泣けば、三勝涙に昏れながら、何
のそうした心でしませうぞいの、たとひ此世はゑ添はずとも、未
来は云ふに及ばず、今度のな、今度のく今度のくつと今度
の後の代迄も、夫婦と成つて離れぬやうにと、思ふ心で括つて置
いた、早う殺して後からござれと、手を合すれば、おふくよふ
云やつた、念仏申しや、南無阿弥陀仏と差通すれば、あつと斗の
たゞ一声に、血汐は流れて小袖の模様、花の姿も忽ち変る、顔も
心もいと細々と、物凄ければ、顔を隠して南無阿弥陀仏、直ぐに
我身も笛掻き切て、過ぎし亥の年霜月七日霜と消へ行く夜明の
鳥、可哀いくと鳴く声に、宵の口舌も皆仇し野の、露も此身も
同じ夢兎角は戯れ遊べ、

この褌と褌とをしつかりと括り合わせた心中は千日寺心中の特徴
で後の浄瑠璃にも描かれ、世に「褌結心中」と噂された。

三勝半七の心中事件がはじめて人形浄りに取りあげられたのは
廿五年忌の「笠屋三勝廿五忌」で享保四年（一七一九）〔外題年
鑑〕には宝永六年、（一七〇九）「南水漫遊」には享保元年（一七
一六）とあるが誤り）豊竹座で上演された。作者は紀海音である。

上巻（大和五条地藏堂前）馬から下ろされた旅稼ぎの三勝と家を
追い出された木綿布子姿の半七と話している所へ今市の善右衛門が
来るので半七は隠れる。善右衛門が半七の悪口を言うので半七がた
まりかねて出ると善右衛門は三勝の伯父平左衛門に貸した四貫五百
目の金を返さねば三勝を師走には女房にすると言い、三勝を無理に
連れ去る。半七が跡を追おうとする時女房おすがが現われ、引止め
る。附近の茶屋で半七は勘当後始めて女房としみつ語り合う。

中巻（三勝内の場）伯父平左衛門と母が窮地に追い詰められた三
勝を慰めている時夜番が来て善右衛門が代官所へ訴えたと知らせた
ので平左衛門は申開きに会所へ行く。折柄半七が訪ねて来て、互に
書置を見せて覚悟を語り、貞節な女房に対する申訳に半七の左腕に
彫った三勝夫の入墨を灸を据えて消して貰う。そこへ善右衛門が平
左衛門の胸ぐらを取ってやって来るので半七は隠れる。二人は口論
の末大立廻りをする。半七が出て消した入墨の腕を見せてもう三勝
と縁を切った、明日は必ず三勝を送り届けると言うので善右衛門は
だまされて、喜んで帰る。平左衛門は折角の自分の志も無になつた
と怒り、二人を外へ突き出す。

下巻（死出の道行）二人は千日の墓所へ辿りつく。三勝と半七の
間に出来たお通を背にした母と平左衛門が後を追うて来たので火屋
の中に隠れてやりす。三勝は二人の褌を結び合わせ半七の脇差

に貫かれ、半七も咽喉笛を掻き切つて重なり合つて死ぬ。

本曲は三勝半七ものの傑作で直接間接この後の三勝ものに大きな影響を与え五十年忌には、「女舞劍紅楓」が春草堂（陸竹和佐太夫で座本陸竹小泉太夫と同人）によつて作られ、延享三年（一七四六）道頓堀の陸竹小泉太夫座で上演された。この作ではじめて半七の父を半兵衛とし、半七の許嫁の妻お園が出て来る。この筋立をうけ更に工夫をこらして作られた浄るりが「艶容女舞衣」で今日も文楽の舞合に生命を続けている名作である。安永元年十二月廿六日（一七七二）豊竹此吉座で上演された。作者は竹本三郎兵衛（人形遣の名手二世吉田文三郎）豊竹応律（豊竹座の創始者若太夫こと後の越前少掾の子）八民平七等の合作である。

上巻（生玉の段）（島の内茶屋の段）中巻（新町橋の段）（長町の段）下巻（今宮戎の段）（上塩町酒屋の段）と分かれ、現在文楽座で上演されるのは長町美濃屋の段と酒屋の段と「艶容女舞衣」では最後に三勝半七が死なずに助かるように変えられているがもとに帰つてそれに笠屋三勝廿五年忌の道行の段をアレンジして最後につけることがある。海音の「死出の道行」ではこの心中場に三勝の伯父の平左衛門とお通を負うた母や家主同行の人々を出しているが「道行箱夜の千日」では半七の親の半兵衛夫婦にお通を背負うた丁稚を出しているのが大きな違いであるが大筋は似ている。有名なお園

のサワリ今頃は半七さんの「酒屋の段」の演出は既に岩波古典文学大系の「文楽浄瑠璃集」で書いたのでここでは海音の舞合を偲ぶために「道行箱夜の千日」を略述しよう。

（舞台装置）千日火屋前。本手の下手火屋、上手塀、その手前につるべ井戸あり。上手、塀の前に獄門のさらし首にごさを掛けているので生首二つははじめ見物には見えない。

首、髪、衣袋

曹屋半七、若男首（白塗り）目の動きなし、描き眉、町人鬘、白手拭で頬被り、堅箱お召の着付、小紋の下着黒襟、博多一本独鈷の帯

美濃屋三勝、新造首（白塗り）目の動きなし、描き眉、油付つぶし島田、黒又は紫縮緬紅衷の頭巾、黒又は鉄色、茄子紺の縮緬裾模様の着付赤たまのりの下着、傾城襟、白博多帯、朔色のしごき、曹屋半兵衛、世話の男首（薄卵色）ネムリ目、動きのフキ眉、胡麻の油付町人鬘、鼠小紋又は茶無地袖の着付、黒襟、茶無地又は鼠小紋袖の羽織、黒縹子の帯、

半兵衛女房、婆首（薄卵色）目の動きなし、眉なし、胡麻の塗髪、鼠小紋縮緬の着付、鼠襟、茶羽二重の帯、東くげ、

丁稚長太、丁稚首（薄卵色）目の動きなし、動きの八の字眉、五つぐくり、木綿縞の着付、黒襟、柿茶色木綿の帯、茶木綿の油前

垂、赤襦なほ

お通、娘の子役首、(白塗り)目の動きなし、描き眉、おたばこぼん、黄八丈模様の荷付(付帯)赤襦。

舞台の衣裳は実際の衣裳とちがっているがこれは見た目によることが多い。「心中天の網島」の原作による演出の時衣裳も元禄時代にかえそうとして中村貞以画伯考証のものをつくろうとした時雁治郎がそれでは治兵衛のイメージをこわしますと頑として聞かなかつたという話もある。文楽の「曾根崎心中」の時にはながく上演されていなかっただけに素直にすつと考証はパスした。三田村鳶魚の「大衆文芸評判記」ではないが、歌舞伎や文楽のものを時代考証でもし出したらたまつたものでない。さてチョンと折が追入つて暮があく。口上があつて太夫が語り出す。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、夢の浮世の仇し夢たゞこれ宿世の因縁か、哀れなるかな三勝半七」小暮があげられると頬かぶりした半七が胸を袖で抱くようにしてうなだれて下手から舞台へ現われる。すぐ小暮がしめられ、「川と寝た夜の可愛子を」で、また小暮があくと頭巾をかぶつた三勝がこれも悲しみにうなだれて続いて下手から出てくる。「捨てて二人のゆく果ての、冥途の道の長町を、足はかどらずとほく」と歩み来、二人並んで静かに正面を向く。

「霜夜に牙ゆる月代の」で下手空を眺め「更け行く空にしんく

と」で二人寄り添い「身にしみたくと冷え互る」でそのまゝ坐り、「千日寺の鐘の音に」で下座で鐘の音をゴーンと響かせ、「引かるゝ如く漸うと、火屋の辺りに着きにける」で、又立上つて半七右手で三勝の左手を持ち舞台中央に歩み、右足を前にし止まる。「三勝涙押し拭ひ、」で頭巾をとり涙をふき、「既に覚悟を極めしもの、今さら愚痴の繰り言ながら思へば不憫や昨日まで」で両手をあげ前に乗り出し、「母が乳房にとりついて」で両乳房を抱きしめゆする。半七はたまらず両手をひざにうなだれる。「睡れしものを明日よりは」で泣き崩れ、「私を求め」で立上りトンと左裾を下手に入れて立膝をして、「泣くで」で顔を一旦ひいて「ある」でくるりとうしろ向き(下手うしろぶりの型)になつて、顔を上手へ廻して振り返り、もとへ戻してそのまゝ泣き崩れる。「これこのやうに吸る乳の」で半七のそばにより、「何としようぞと身を悶え」で胸をだきしめもだえ、「歎く姿のいぢらしや」でやゝ下手向き右手に紫頭巾をもち口にくわえて泣く。

「思ひは同じ半七も」で顔をあげ三勝を見「あゝ悔むまい、歎くまい、」と首をふり「死んで現世の官職と、互に心定めしもの」と三勝を見、胸を押え「今さら涙愚かなり」と首ふり「この上はたゞ二親に、不孝のお詫びと」両手を合わせ、「一つには、お國の心の親切を、頼む外なき今の仕儀」と前を指差し、「いざ最期所すまとなた

へと」招き「二人手に手を取り交し」よわ／＼と立上り、「こゝやよからん」「かしこやと」二人は別々に上手下手へとゆき、「さ迷ひ歩く墓あいの獄門の木に行き当り」で三勝は上手にさがる拍子にトンと肩が木に当るとバラリとむしろが落ちるので、さらし首が二つ暗に浮ぶ。三勝はハッと腰をぬかし驚き倒れて「あつ怖と抱き付けば」で腰が抜けた駄で半兵衛の傍に這い寄って、ひしと見物に後を見せて半兵衛の胸にしがみ付き顔をつける。「男はつく／＼うち守り」で半兵衛は正面向き抱き寄せて上から見下ろし、「ハテ愚かや三勝、今死ぬる身を持ちながら、何を恐がることあらう」と言い聞かせ、「人手にかゝり死ぬるのも」と獄門を見返り立上り「われと刃に消ゆるのも、同じ冥途の道連れよ」と両手に手拭を一文字にひっぱってじつと見、はら／＼となる。

「折から聞ゆる人声火影」で慌てて三勝を招き、「見付けられては死出の妨げまづこなたへと辺りなる火屋の内にぞ隠れ入る。」で二人は顔を正面に残しながら三勝に手まねで早く／＼と促し奥の下手火屋の中に遁入る。

「二人の行衛そこごと、尋ね捜して半兵衛夫婦、丁稚はお通を背に負ひ、灯影も暗き提灯の」で丁稚の長吉太い白紐でお通を負い右手に提灯を持ち前にかかげながらやって来る。続いて半兵衛、最後に母親がよわ／＼と歩み舞台中央に来て半兵衛は両手を後にやり

急ぎ歩いたので疲れた駄で前かゞみの腰を伸ばす。「足もたど／＼声しめり、こゝにも見えぬ、これからは生玉辺り下寺町生きてさへ居やうなら」で、長吉は獄門の首を見てびっくり提灯を落しがたがた腰を抜かす半兵衛は気づかず。「また、どうなりと料簡の、つけられないものでもなし」で長吉を見、落した提灯をひろいもってさらし首をすかし見て左手でおがみ、長吉をたしなめる。長吉腰が立たぬので母はお通を抱きとる。「心せはしや来やれ、半七やーい」と半兵衛は空しく呼び「三勝どの、必ず死んでくれるなと声もはばかり呼び過ぎる」で半兵衛を先に長吉、老母の順で上手に去る。

「やり過ぎて半七、三勝、火屋よりつ／＼とまろび出で」半七正面に追うように出て来、続いて三勝も正面へ出、「行く後影伏し拜み」上手向き手を合せ「老いたる二親残しおき、死する我等が不孝の科」と半七は両手を出し見、「お赦しなされて下されと土にひれ伏し悶ゆれば」で両手を突いて泣くと、「三勝もどうと居て」で泣きくずれ「いかなる宿世の罪あつて」で左片手遣いになり右手を左遣いにあずけ切なくクリズして「現世の悲しみ見るこやと」半七の肩に後ろから手をかけ顔見合わせハラ／＼となり、「たゞこの上は不孝ながら」と半七の上手に出て「行末長きお通のこと、たゞたゞ願ひ上げますと」と両手を合わせて、そのまゝ大地に両手をつき深く頭をさげ「泣いじやくるこそ哀れなる」でよよとその場に泣き崩

れる。半七も両手を膝にうなだれる。「かくてはならじと氣を取り直し、互の心乱れ髪なでつけられつ」で半七は下手後ろから三勝の髪を乱れをとゝのえてやり「なでつけつ」で今度は三勝が上手後ろから半七の髪を縛けすり「最後たしなむ顔と顔」で互に見下ろし見上げ、「二人は用意かひがひしく」で二人離れて半七は立上り衣服を直し、三勝は左裾を入れて立裾となり「三勝は抱え帯、くらくと引きほどき」で両手で抱え帯を解き坐つて「裾と裾とをしつかりと」で自分の着物の裾を結びその抱え帯の一端を持つと下手の半七の側に寄り「結び合はせつ結び合はず」で半七の襟に結び付ける。半七は見下ろしこの様子をじつと見て、「これ三勝この結び合はせは何事ぞ」と抱え帯をぐつと両手にひっぱり、右手に取上げて突きつけ、「さては、そなたをこのわしが殺しておいてそのあとで逃げると思つて居やるのか、え、浅ましやと恨み声」で正面向き高くあげ叩き付け三勝に顔をそむける。「女はわつと泣き出だし」で半七を見上げて泣き、「そりや聞えませぬ半七さん」で両手ついたまゝ首をふり、「今この際に何言はんす。」と起き直り、「こなさんとわしが仲」と左手で半七をさし、「先の世のまだ先の世の」で左手を突き、首をひねり、「ずんど今度の今度まで」と、じつと半七を見上げ、「女夫になりたいばつかりに」で切なく右手をさし、やさしく立上り抱え帯の置かれた下手に行き坐り取上げ、「離

れぬための裾結び」と両端を持ちたらし、「エ、情けない詞や」とその抱え帯を顔に当てて泣きくすれる。「と言はれて半七面目涙」で半七はらくと涙をこぼし、「オ、謝つたく、千年万年先の世まで、必ず二人は一緒ぞや」と三勝の方に向き直つて言う。「エ、嬉しい有難い、永い未来の契りこそ願ふところの住家なり」と三勝は半七の膝にすがりついて感謝し、「早う殺して殺して」と二人手をとりあい、「死を悦ぶぞ哀れなる」で半七は正面より三勝の肩に手をかけてぐつと抱きしめ三勝は後姿を見せて半七を見上げるように抱き付く。「半七脇差ずばと抜き」で離れて脇差を抜いて上手に立つ。三勝は坐つたまま手を合わすと「胸の辺りに押当てて」で半七は左手で三勝の胸を押え脇差をかざし、「サアたゞ今ぞ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、弥陀仏と」と突かんとするが、「差し通さんもこぶしはふるひ、二三度、四五度遠近の」で半七はささんとして顔をそむけ、又差さんとして顔を背け、「ぐつと通せば」で思い切つて突きしはつとして手を放し倒れる。「うんとばかり」で三勝は脇差をのどに突き差されたまゝ、苦しみがく。「苦痛させじと止め刃」で半七は正面向いて三勝の咽から脇差を抜いて又再び突き差すと三勝は後姿のまゝ顔をそらす。「われもすかさず逆手に持ち」で半七は下手正面に坐つてその血のついた脇差をじつと見て「賭手にゑいとどの笛」で立上つて突きし、「かき切る血汐」で

我が咽をえぐり「霜夜の干日」で両手を上手についてどうと倒れる。三勝は下手向き苦しい息の下で顔をあげてこれを見、「朱に染めなす酉屋の」で二人は近いながら近寄り、「その半七と三勝の、哀れ涙の物語り」で縋り寄り抱き付き、半七は右足をふんばり、三勝は左裾を立てて力をこめよろ／＼と二人は立上り、又倒れ、苦しきのあまり三勝は野井戸の方へ近いよりそれを追うようによるめき／＼半七も野井戸の方へ近いより「伝へて筆に残しけり」でやっと井戸の丸井筒にすがりつきよろ／＼とつるべを持つとつるべがピンと上にはねる。それをきっかけに二人は抱きつき三勝は半七を見上げ、半七は三勝を見下ろしその上に覆い重なるようにして顔を伏せて暮になる。